

筑波大学新聞

第383号

編集責任
筑波大学新聞
編集委員会

TEL・FAX 029(853)6699

E-mail
shinbun@
un.tsukuba.ac.jp

発行所
筑波大学
茨城県つくば市
天王台1-1-1

目安箱 投書募集中

あなたの思い聞かせてください

中央図書館エントランスにて

注目記事

- 新歓祭5年ぶり制限なし開催
- 「そばたん展」に力作そろう
- 体操全日本で上田吊り輪2位
- 柔道田中男子73kg級で日本一
- 被爆証言87歳の村上さんに聞く

8 7 6 3 2

特集

国際化映し出す
筑波大の日本語教育 5

ワシントン大とAI共同研究 米2社が5000万ドル支援



調印式に参加した永田学長(右から3人目)ら=筑波大広報局提供

筑波大は4月10日、人工知能(AI)に関する連携協定を米ワシントン大と結んだ。米半導体大手エヌヴィディアと米IT大手アマゾンも参加し、10年間で計5000万ドル(約75億円)を支援する。岸田文雄首相の訪米に合わせ、首都ワシントンの米商務省で調印式が同日行われた。筑波大からは永田恭介学長が出席した。今年秋にも共同研究が正式に始まる。

(菅元愛香 心理学類4年)

共同研究ではAI研究に加え、人材育成やアントレプレナーシップ(企業家精神)の涵養、研究成果の実用化などにも取り組む。生成AIには個人情報を含めた大量のデータが必要で、プライバシーを守る研究が求められている。ハイテク企業が集う米シアトルにあるワシントン大の立地や筑波大の学際性を生かし、医療や体育、ものづくりなどの分野に応用できるAIの開発も予定している。

人材育成では、学生向けの特別プログラム実施や、研究者が両大学や企業間を行き来して交流を深めることなどを検討中だ。

5年ぶり復活の企画も 新入生が中心となって交流を深める「第50回回生祭」



応援部 WINS の力強い発表(6月1日、平砂学生宿舎前) = 壬生奏太撮影

新入生が中心となって交流を深める「第50回回生祭」が5月31日、6月1日に平砂学生宿舎周りで開かれた。初回から丸50年の節目の年で、やどかり祭実行委員会による特別記念企画も登場。会場は食べ歩きしたり、ステージ発表を楽しんだりする学生らでにぎわった。

平砂共用棟南側のメインストリートにはかき氷や輪投げなど50を超える模擬店が立ち並んだ。

筑波大の友人と一緒に訪

筑波大は人工知能科学センターを2017年に設置。ビッグデータを活用したAI研究を進めてきた。同センター長の櫻井鉄也

教授(シス情系)を中心に、個人情報を守りながらビッグデータを活用する技術を米オハイオ州立大などと共同開発した実績があり、22

年秋に駐日米大使館から連携を打診されていた。櫻井教授は「共同研究で10年の長期間は珍しい。産官学の広い視点からじっくり研究に取り組み、筑波大をAI研究の一大拠点にしていきたい。学生にとってグローバルな経験ができる機会になれば」と語った。

CFOに野手氏 銀行出身 自立した財務基盤確立へ



野手弘一氏

筑波大は4月1日、「事業・ファイナンス局」を新設した。資金調達と資金・資産の運用を一体的に行うことで自立した財務基盤を

野手弘一氏が着任した。野手氏は「資産運用・ファイナンス」と「事業・リース推進室」の2室からなる。財務部門から

野手氏は「資産運用・ファイナンス」室は運用収入の増加を目指す。また、学内から意欲的な職員を募ってファンドマネージャーも育てる。他大

の職員を受け入れ、筑波大に身につけた知識や経験を活用してもらったり、他大と共同運用したりすることで、国立大全体の資産運用の高度化を図る。

事業・ファイナンス担当の益戸正樹理事は「筑波大の附属学校の子供たちへの金融教育を進めたい。また、筑波大の卒業生が将来、CFOとなり、運用に携わるようになれば素晴らしい。大学での充実した時間がロイヤルティーを生み、社会

人になってからの寄付文化にもつながれば」と語る。事業・リース推進室は運用する資金集めを担う。インベシジョン拠点「IMAGINE THE FUTURE Forum」で実施予定の企業との開発研究で得られる資金などに加え、世界の卒業生ネットワークからの寄付金獲得などを想定している。

コンプライアンス(法令順守)徹底のため、資金運用委員会の体制も強化し

委員1人の過半数を外に委嘱し、運用や経済分析、不動産投資などの専門家に加わってもらった。

野手氏は「経験を生かして透明性ある運用を行い、筑波大の財政面の発展と持続可能性確保に全力を尽くす」と話した。

筑波大は昨年度50億円を独自に運用したが、今後は100億円規模の運用を目指すという。

学生自らが探究したい課題を設定し、教員の助言を受けながら探究を進める授業「学問探究チュートリアル」が今年度春Bモジュールから開講した。筑波大は2020年10月に指定国立大学法人に指定された。その際に「チュートリアル教育の全学的導入」を掲げており、同授業はそれを先導する役割を担う。今年度の受講者は36人だが、約10年をかけて全学的導入し、「つくば型チュートリアル学問探究チュートリアル」を合学域群など計8学群・学

域群の学生が受講を希望した。専門分野が異なる28人の教員がチュートリアル教師となって指導する。

筑波大チュートリアル学問探究推進委員長の坪内孝司教授(シス情系)によれば、春Bモジュールではグループワークが中心になる。まず、受講生それぞれが大学で取り組んでみたいことをまとめて、他の受講生と共有する。さらに、気候変動など地球規模課題を題材に、チュートリアル教員も一緒に、何が課題かを発見したり、解決の糸口を見つけての手立てを考えたりするトレーニングを積む。

春Cモジュールと秋学期は、学生2人とチュートリアル教員2人が組になって個別の対話を重ね、受講生の立

てた問いに沿った活動を実践する。また、各受講生は学びの軌跡を共有し、2年次以降の学びにつなげていく。

「学問探究チュートリアル」の開講を足がかりに、2028年度からの6年間で1000人規模に拡大し、34年度からの6年間で16000人規模に拡大する計画だ。

坪内委員長は「一方的な知識の伝達にとどまらず、学んだことを課題解決に生かせるようになることが、大学教育の理想だ。学問探究チュートリアルはその導入であり、受講生には知的好奇心を活性化する機会にしてほしい」と語る。

(川上真生 社会学類3年)

「つくば型チュートリアル学修」始動

40年度までに全学で導入へ



「学問探究チュートリアル」のポスター(5月29日、本紙編集部で撮影)

学生自らが探究したい課題を設定し、教員の助言を受けながら探究を進める授業「学問探究チュートリアル」が今年度春Bモジュールから開講した。筑波大は2020年10月に指定国立大学法人に指定された。その際に「チュートリアル教育の全学的導入」を掲げており、同授業はそれを先導する役割を担う。今年度の受講者は36人だが、約10年をかけて全学的導入し、「つくば型チュートリアル学問探究チュートリアル」を合学域群など計8学群・学

域群の学生が受講を希望した。専門分野が異なる28人の教員がチュートリアル教師となって指導する。

筑波大チュートリアル学問探究推進委員長の坪内孝司教授(シス情系)によれば、春Bモジュールではグループワークが中心になる。まず、受講生それぞれが大学で取り組んでみたいことをまとめて、他の受講生と共有する。さらに、気候変動など地球規模課題を題材に、チュートリアル教員も一緒に、何が課題かを発見したり、解決の糸口を見つけての手立てを考えたりするトレーニングを積む。

春Cモジュールと秋学期は、学生2人とチュートリアル教員2人が組になって個別の対話を重ね、受講生の立

れた水戸市の大学生、松崎沙彩さんは「模擬店に加え、ステージ発表もあるのが楽しかった。楽器演奏とチャリディングが一体になった応援部のパフォーマンスは迫力があったと話した。

1日午後にはのど自慢企画「やどかり」が行われ、予選を突破した6人が出場した。5年ぶりの復活で、参加者の熱演を観客が拍手

子で応援した。

50周年記念企画「神成ダービー」には、祭の実行委員のメンバーが登場。グローバルヴィレッジから平砂共用棟まで約2000人を

約30人が駆け抜けた。実行委員長の河合達之輔さん(障害3年)が1位となり、福男として御輿で担がれ、観客に祝福された。

河合さんは「50周年の節目で、多くの卒業生も駆けつけてくれた。クラウドファンディングでは昨年の4倍近い110万円余が集まり、企画を充実させられた」と話した。(菅野心平)

8月6日。地元広島市では毎年、「原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」が開かれる。高校時代はこれとは別に、学校で開かれる「原爆忌」に参加していた。当時旧制中学だった母校では、米軍による原爆投下で生徒・教員522人が被爆死した。焼香に訪れる遺族の姿に、原爆は過去のことではないと思いつた▼ところが、つくばの8月6日は他の日とほとんど変わりが無い。自分自身、原爆や平和について周囲の学生と語ることもなく、1日が過ぎ去っていった▼何かできることはないか。そう考えていた矢先に、つくば市で被爆体験を語り続けている女性の存在を知った。今号(8面)で紹介した村上啓子さん(87)だ▼取

材する中で、村上さんのいとこ、浜田満さん(享年13歳)は母校の先輩で、被爆死した522人の一人だと知った。空襲時に消火活動がしやすいうよう、あらかじめ建物を壊して防火地帯を作る建物疎開作業中に被爆したという。村上さんは「散歩に連れていってくれたり、一緒に遊んでくれたりした。兄のような存在だった」と目を震わせた▼「20世紀の地球上は、どこもが戦場だった。自分の出身地でこんなことがあったかを知り、自分の軸を持ち、武力に頼らず、平和貢献してほしい」。筑波大生への村上さんの呼びかけだ。霞ヶ浦周辺には海軍航空隊の遺跡が数多く残り、阿見町には予科練平和祈念館もある。この夏は足元に残る戦争の記憶をたどりたい。

新歓祭 コロナ前の活気戻る 運営は新体制に



在学生が新入生に声をかけながら学内を練り歩いた(4月6日、第一エリアで) = 加藤緑撮影

新入生歓迎祭(新歓祭)が4月6日に開催され、昨年より約80団体多い約200の学生団体が参加した。第一エリアの教室や屋外ブースでは展示やヒラ配りが行われ、石の広場など三つの特設ステージではパフォーマンスが披露された。昨年は感染症対策で人数制限を設け、午前と午後で参加者を分けたが、今年はこれらの制限がなくなった。用意されたパンフレット2000部がなくなる人気で、会場にコロナ禍前の賑わいが戻った。

(勝原経太II社会学類2年、野田健祐II応用理工学類4年)

第二エリアでの教室企画には約20団体が参加した。ボードゲームやテーブルトーク・ロールプレイングゲーム(TRPG)好きが集まるサークル「T.A.S.C.(たすく)」はボードゲームの体験会を開き、教室の外まで順番待ちの行列ができた。

約30種類用意されたゲームは、来場者がその場でルールを作って楽しむものが多く、新入生同士の交流も深まっていた。

また、松美池前には今年

度からステージが新たに設けられ、ダンスや太鼓パフォーマンスなどを立ち止まって鑑賞する新入生が多く見られた。

新歓祭の運営組織は今年度から変わった。これまで文化系サークル連合会、体育系同、芸術系同のメンバーで構成する新入生歓迎祭推進委員会(新推委)が運営していたが、全学学類・専門学群・総合学域代表者会議(全代会)と学園実行委員会(実委)も運営に加わった。

昨年度、割り振られた業務をこなさないメンバーが多く、運営に支障が出ていたという。

新歓祭の時長隆乃介委員長(物理3年)は「制限な

4大学結び環境問題議論

「行動起こすきっかけに」

大学生が環境問題について考え、行動を起こすきっかけを作ることを目的とした「Japan Sustainability W

大学生が環境問題について考え、行動を起こすきっかけを作ることを目的とした「Japan Sustainability W

「行動起こすきっかけに」

大学生が環境問題について考え、行動を起こすきっかけを作ることを目的とした「Japan Sustainability W

今年4月に入会したマレーシア出身のインシラー・ビンティ・モハマド・シクリさん(目目2年)は「実家では猫を15匹飼っており、猫に会いたくて入会した。活動を通して猫と触れ合えるのが、毎週の癒やし」と話す。

昨年は地域猫が多い江の島に猫を見に行くイベントも開催した。牧原さんは「コロナ禍で減ったミーティングやイベントの頻度を増やし、以前の活気を取り戻したい。その上で、学生団体として成長し、CAPINが中心に行っている医療やTNRの活動にも積極的に貢献したい」と語った。

(結城希II国際総合学類2年、写真も)

※HSCaTでは子猫の保護活動などほしていません。保護の委託はご遠慮ください。

つくば市内で本読みデモ ガザ侵攻に抗議

パレスチナ自治区ガザ地区で昨年10月に始まったイスラエルの軍事侵攻に抗議するデモが、米国をはじめ世界の大学に広がっている。筑波大でも安田菜由さん(人文P前期2年)と上田由至さん(人文P後期4年)が、パレスチナに関する本を路上に並べ、道行く人々に読んでもらう「本読みデモ」を今年3月に始めた。2人は「静かなデモを通じ、現地の実情を多くの人に知ってほしい」と訴えている。

(金慧欣II知識情報・図書館学類2年、写真も)



活動を続ける安田さん(右)と上田さん(5月26日、つくば駅前広場で)

つくば駅前広場(つくば市吾妻)で4月21日に開かれたデモでは、「パレスチナがわ出版」や「まんがパレスチナ問題」(山井教雄著、講談社現代新書)など約20冊の書籍がビニールシートの上に並べられた。「今おきている大量虐殺のパンチに座り、本を手に読みふけていた。」

SNS(ネット交流サークル)で2人の活動を知って参加したという東京都品川区の20代女性は「本読みデモは静かだが、道行く人が見てくれることで、抵抗運動になっている。声を上げるデモより、参加しやすい」と話す。

安田さんは3月14日、つくば駅前で行われたイスラエルのガザ侵攻に抗議す



博士号

あまえさんたちのために叱ったわけじゃないよ。

博士号

あまえさんたちのために叱ったわけじゃないよ。

HSCaT

筑波大には学生宿舎周辺に住み着いた野良猫、通称「大学猫」がいる。その猫たちの世話や管理をしているのが「HSCaT(Humane Society Cat's Assistance in Tsukuba)だ。

現在のメンバーは約110人。NPO法人「動物愛護を考える茨城県民ネットワーク」(CAPIN)から餌の提供などの協力を得て、計10匹(金砂エリア7匹、一の矢エリア3匹)の大学猫の面倒をみている。

それぞれの猫にはコンテナを加工した専用の寝床が用意され、毎日給餌給水する。1週間のうち3日間



世話をする中で人に懐いた「たいがくん」(5月19日、平砂学生宿舎付近で)

日々の猫の様子を撮った写真はサークル内で共有され、ゴロンと寝そべる姿や甘える姿がメンバーの心を和ませている。

TNRは新しい大学猫がすま着く度に行われていく。最近では昨年夏に現れた雄の茶トラ猫の「たいがくん」にも、翌

大学猫と共に生きる

大学猫と共に生きる

筑波大には学生宿舎周辺に住み着いた野良猫、通称「大学猫」がいる。その猫たちの世話や管理をしているのが「HSCaT(Humane Society Cat's Assistance in Tsukuba)だ。

高橋が短距離2冠 大会 MVP 男女とも総合2位

【国立競技場(東京都新宿区)で川上真生II社会学類3年、写真も】関東学生競技対校選手権(関東インカレ)が5月9〜12日に開かれた。筑波大は高橋亜珠(体育学)が女子100mハードルと女子200mハードルで優勝し、大会女子最優秀選手(MVP)に選出された。筑波大勢は男女合わせて計5種目で優勝し、リレーを含め計31種目で延べ59人が入賞した。総合順位は男女とも2位で、男子は昨年の6位から大きく順位を上げた。

陸上



また、女子走高跳では宗澤ティファニー(同4年)と八重樫登佳(同4年)が2年ぶりの優勝を果たした。宗澤は「応援を受けた」と話した。高橋は「本職の100mハードルでは、ハードルを乗り越える体勢から走る体勢に素早く戻れたことで、良い走りが出てきた。総合順位争いでチームに貢献できうれしかった」と話した。

また、女子走高跳では宗澤ティファニー(同4年)と八重樫登佳(同4年)が2年ぶりの優勝を果たした。宗澤は「応援を受けた」と話した。高橋は「本職の100mハードルでは、ハードルを乗り越える体勢から走る体勢に素早く戻れたことで、良い走りが出てきた。総合順位争いでチームに貢献できうれしかった」と話した。



ゴールラインをトップで走り抜ける高橋(5月12日、国立競技場で)

が楽しんで走ることができた。パリ五輪に向け、日本選手権で結果を残したいと話した。男子ではこの他にもハンマー投げの山口翔輝(同2年)が自己ベスト(63.56m)で準優勝するなど計15種目で延べ28人が入賞した。陸上競技部は短距離と長距離、跳躍、混成、投てきの5ブロックに分かれている。主将の二見優輝(同4年)は「各ブロックで目標点数や課題を設定した。各種目で満遍なく得点できたことが男女とも準優勝につながった。秋の日本インカレでは男女とも優勝したい」と一層の飛躍を誓った。

初のスポーツフェス開催

地域と交流 18運動部集結

【筑波大学第一サッカー場で山本貴世II国際総合学類2年、写真も】筑波大学スポーツフェスティバルが3月31日、筑波大学第一サッカー場で初開催された。筑波大学蹴球部など筑波大の18運動部が集結し、初心者でも楽しめる体験コースを出展した。各コースを巡るスタンプラリーも行われ、家族連れや各部のファンら約1000人が来場。会場にはスポーツを楽しむ人々の明るい声が飛び交った。

同フェスは蹴球部主催。ハンドボール部などが体験同部の辻倉史さん(障害2年)が「地域の人々に、普段はなかなかできないスポーツ体験の機会を提供したい」と発案し、他部にも連携を呼び掛けた。当日は同部をはじめ弓道部やラグビー部、オリエンテーリング部、ラクロス部、



体験コーナーで格闘ゲームをプレイする参加者(3月26日、つくば国際会議場で)

体操部のプースでは、G(バランス)ボールを使った遊びを体験できた。参加者は、部員の補助のもと、並べたボールの上を腹部で滑る「スパイダーマン」などの技を楽しんだ。

会場には、各競技で使用するラケットやボールなどの用具を持って記念撮影ができるフォトスペースも設置された。イベントのフィナーレは部対抗リレー。来場した子供たちには「応援体験」が用意された。蹴球部が普段の試合で使っている掛け声を教わり、太鼓の音に合わせて、メガホンで選手たちへ声援を送った。

辻さんは「運動部の活動が盛んな筑波大ならではのイベントにしたい。プース配置の面で反省点が残ったが、来場者に楽しかったと言ってもらえた。子供たちが競技を始めるきっかけになればうれしい。今後も開催できるように、検討を進めていきたい」と話した。

全日本総合 上田吊り輪2位

インカレへ弾み

体操競技の個人日本一を決める全日本個人総合選手権が4月11〜14日に高崎アリーナ(群馬県高崎市)で開かれた。筑波大からは女子5人、男子4人が出場し、上田悠太(体育学3年)が男子種目吊り輪で2位に入った。同床に出場した平松航河(同4年)は27位、昨年度の同選手権で女子個人総合3位だった深谷こころ(体育学1年)は同12位だった。

体操



200、演技の出来栄を示すEスコア(演技実施点)は8.333だった。決勝戦では着地も安定し、予選を上回る14.666点(Dスコア6.200、Eスコア8.466)を挙げたが、トップには0.200点及ばなかった。上田は「全日本規模の大会では自己最高順位だった。平松は床で7位だった。



地面と並行を保つ力技の姿勢は高く評価された=体操競技部提供

ゲームで盛り上がる会場

若者ら体験や観戦楽しむ

eスポーツ

【つくば国際会議場(つくば市竹園)で川上真生II社会学類3年、写真も】コンピュータゲームで競い合う「eスポーツ」の普及を目指したイベント「茨城県eスポーツフェス」が3月26日、つくば国際会議場(つくば市竹園)で開かれた。会場にはeスポーツの「する・みる・まき(やる)」をそれぞれ体験できるコーナーが複数設けられた。大学生チームなどによるエキシビジョンマッチや、eスポーツの健全な発展を目指す

研究者と実践者のトークセッションも実施された。若者を中心に約300人が会場を訪れ、さまざまな形でeスポーツを楽しんだ。茨城県と筑波大スポーツ



体験コーナーで格闘ゲームをプレイする参加者(3月26日、つくば国際会議場で)

インバウンション開発研究センター(SIRC)が共催した。両者はeスポーツ科学を推進する産学官連携協定を結んでおり、SIRCの松井崇助教(体育系)が中心となって開催にこぎつけた。

また、エキシビジョンマッチでは、選手と観客に心拍数などの計測バンドを装着してもらい、どのタイミングで増減するか、その増減が選手と観客で同調するのかなどが調べられた。松井助教は「eスポーツを自分でプレイするだけでなく、他者のプレイを見たり、運営側で支えたりすることも楽しめるイベントだった。会場全体に一体感が生まれていたように思う。今後もこのようなイベントを開き、eスポーツの科学と実践を盛り上げていきたい」と語った。

広告欄

掲載のお問い合わせは

shinbun@un.tsukuba.ac.jp

までお願いします。

